

# 高校生のための音声づくりから発表活動まで

萩原 一郎

## 1. はじめに

英語授業における生徒による発表活動に関しては、中高においてかなりの温度差が現在でも存在している。「平成30年度 中学校等における英語教育実施状況調査【集計結果】」（文部科学省）の結果を見てみよう。『話すこと』及び『書くこと』における『外国語表現の能力』を評価するためのスピーキングテスト及びライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況について」によると、スピーキングテストを行っている学校の割合は中学校3年生では91.6%であるが、高校のコミュニケーション英語Ⅰでは63.8%、英語表現Ⅰでは44.1%となっている。

生徒の英語を話す以外の力を測定するには筆記テストで可能であるが、英語を話す力を測定するにはスピーキングテストを行って直接測るのが代表的な方法であろう。しかし、上記の数字に見られるように高校ではまだ英語を話す活動は中学校ほどには行われていないことが透けて見える。本稿ではテストという形ではなく、年間活動の中にかなり大がかりな英語の発表活動を位置づけ、それを一つの目標にしてスピーキングを中心とした年間の授業設計を行なった2つの授業実践を紹介する。対象校は神奈川県立高校3校にわたるが、いずれも中堅校に位置する高校での実践である。

## 2. 英語劇づくり

K高校での「英会話」（当時の高校学習指導要領では「オーラルコミュニケーションA」に相当。現行指導要領では「英語会話」に相当するもの）の授業における英語劇づくりの取り組みを紹介する。

## (1) K高校の当時の英語カリキュラム, 「英会話」の授業について

### 【K高校の当時のカリキュラム】

- 1 年次…英語Ⅰ (3), オーラルコミュニケーションB (2)
- 2 年次…英語Ⅱ (3), ライティング (2)
- 3 年次…リーディング (3), ライティング (1)
- 自由選択…読解 (2), 文法 (3), 英作文 (2), **英会話 (2)**

「英会話」を選択する生徒は大体10人から15人程度。2クラスに分割して, 日本人教師が一人, または二人で担当した。2時間連続の授業で, 1時間はコンピュータ室でビデオ(テキスト *Only in America* : Oxford University Press) を使ったリスニング中心の授業。もう1時間はALTと組んでのteam teachingでhandoutを使用してのスピーキング中心の授業を行なった。生徒がこの講座を選択した動機は「実際に使える英語を学びたい」「英語が話せるようになりたい」「外国人の先生もいて, 楽しそうに感じたので」「面白そう」など。私が担当した後半3年間の受講生徒の4月時点での進路希望は, 4年制大学15, 短大5, 専門学校9であった。

## (2) 授業づくりの変遷

### ①前期6年間

私が「英会話」の授業を担当するようになったのは, K高校へ転勤して2年目であった。前任者の実践はあまり参考にならず, ほとんどゼロからのスタートとなった。最初の6年間は試行錯誤の連続で, 授業の前日になっても何をやるか決まっていなかったというような有様で, これでは授業がうまくいくはずがなかった。

- その場しのぎの授業…授業前日に何をやるか悩む
- 年間の到達目標が不明確
- ALTの作成教材も多用する
- リスニングもCDを使った答え合わせ中心の授業で単調

### ②後期4年間

生徒の授業での反応, アンケート結果などから, 徐々に「使える」教材がいくつか固定されてきた。さらに, 文化祭での英語劇の上演がはじまり, 英語劇が年間の授業の核になった。年間のシラバスもほぼ固定し, 「プリント集」を前もって生徒に渡し, 余裕をもって授業ができるようになってきた。また, いくつか予定の入っていない時間を作り, そこで

授業進度の調整をしたり、日本人教師やALT投げ込みの教材を入れられる余地を残した。

- 文化祭での英語劇上演を核に据える
- リスニングテキストを音声を用いたものから映像を用いたものに変更
- ハンドアウトの固定化→年間シラバスが固定
- 1, 2 学期の最初の授業で、各学期の授業で使用する「プリント集」を配布
- あくまで日本人教師主体で、ALTの教材を穴埋め的に使う

### (3) 年間の授業の構成と狙い

- 買い物、道案内などの「場面別の英会話」的な表現は扱わない
- 授業は年間20回程度しかないため、様々な活動を通して英語を話すことに慣れることを目標とする
- 「オーラルA」よりも「オーラルC」的な内容を目指す

《参考》

オーラル・コミュニケーションA…「日常会話」

オーラル・コミュニケーションB…「リスニング」

オーラル・コミュニケーションC…発展(recitation, speech, debate, discussionなど)

★年間の活動の柱を以下のように分類し、

- ◆ **drama**
- ◆ **speech**
- ◆ **discussion, debate**
- ◆ **story retelling**
- ◆ **others** (その他)

それに合わせて具体的な活動を散りばめていった。

- ◆ **drama** 感情を表現する発表活動を通して、声を出す楽しさを味わう
  - Expressive Reading (sentences, skit) [4月～5月]
  - ↓
  - Recitation [6月末]
  - ↓
  - 文化祭での英語劇上演 [9月]

◆ **speech** 個人的な話題から、自分の意見を言えるスピーチに

○ My Name [5月]

↓

○ Show and Tell [6月]

↓

○ Recitation [6月末]

↓

○ Speech and Discussion [1月]

◆ **discussion, debate** 賛成／不賛成の表明と理由づけから意見交換・簡単なディベートへ

○ Asking and Giving Opinions [6月]

↓

○ Decision at Sea [10月]

↓

○ Debate [11月]

↓

○ Speech and Discussion [1月]

◆ **story retelling**

○ ビデオテキスト *Only in America* を使ったの日常的な練習  
→ さまざまな写真を使ったの story retelling

◆ **others** (その他)

○ Circumlocution, Project (Making TV Commercials) など

#### (4) 英語劇 (*Cinderella*) 上演までの流れ

2回目に取り組んだ *Cinderella* を例に紹介する。

○ 1学期の授業での仕込み

意識的に4月～5月の授業で声を出すことの楽しさを実感させる。徹底的にほめて、その気にさせることがコツ。感情を込めてセリフを言ってみる楽しさを体験するとともに、クラス作りにも役立つ。以下のようなハンドアウトを使用した。

★ **drama** の仕込みに使った "**Expressive Reading**" のハンドアウトから (抜粋)

Step 1 《Pair Practice》

- (1) First read each sentence without expression.
- (2) Then read each one with the appropriate feeling.

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>a. What a beautiful sunset!</li><li>b. Watch out! It's hot!</li><li>c. I'm bored and sleepy.</li><li>d. He's terrible! I hate him.</li></ol> |
|--|

Step 2 《Group Practice》

Read the following with the indicated emotions.

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>a. Going, going, gone! It's a homerun! (loudly)</li><li>b. Leave me alone, will you? (angrily)</li><li>c. What's the matter? You look pale. (anxiously)</li><li>d. Hurry up! We'll miss the bus. (impatiently)</li><li>e. That's a funny story. <i>Ha-ha-ha</i>. (laughing)</li></ol> |
|---|

\* 3人で組になり、一人ずつそれぞれの状況に合うように5つの英文を声に出して読みましょう。うまく言えたかどうか、3人でお互いに評価して表に数字を書き入れましょう。

(*Oral Communication Course C Speak Out* 桐原書店 を参考に作成)

- 「ささやき」作戦で英語劇をやる生徒を増やしていく。

ここでリーダーになりそうな生徒を通じて声をかけていくのが常道。

- 7月 ALT宅でパーティー
- 7月15日 最初の会合 (劇の題材の話し合い)
- 7月18日 (終業式) 放課後会合 (『シンデレラ』に決定)

↓

脚本書き直し (既存のものをALTと私でリライトしていく)

- 夏休み中の練習 (主として、セリフを覚えながらの通し読み)

7月31日 9:30～ 台本 (version 1) の配布

基礎練習

人数がそろわず、配役を決定できず。

↓

不参加生徒に手紙を送付

8月10日 9:00～ 配役を決定

来られない生徒は携帯電話で連絡をとる。

8月17日 10:00～ 練習 (萩原)

8月24日 13:00～ 練習 (ALT)

8月26日 13:00～ 練習 (萩原+ALT)

この日より体育館ステージで練習。

8月31日 11:00～ 練習 (萩原+ALT)

○ 2学期開始

「英会話」の授業は火曜日にあり、9月1日、8日 (修学旅行中のため、臨時時間割で授業なし)、15日と授業が3週つづけてなかった。私が沖縄修学旅行の準備や引率などで、ほとんど関われなくなった。

→9月20日まで、練習を全くやらず、危機的状況となる。

9月22日 (火) 授業で練習

23日 (水) 練習+道具づくり (台本 version 2 配布)

26日 (土) 練習+道具づくり

27日 (日) 練習+道具づくり

\*この頃、ディズニーのビデオ『シンデレラ』をみんなで見て衣装を考える。

同CDをレンタルし、音響を考える。

29日 (火) 授業で練習

\*この頃より、連日7時頃まで残って、練習を繰り返す。

10月 2日 (金) 全日準備 (体育館でリハーサル)

3日 (土) 文化祭当日 (14:00より公演)

4日 (日) 朝7:50に集まり、前日のビデオを見て反省会。

文化祭当日 (11:30より公演)

\*2回の公演ともに見てくれた人の多くが、4日の方が生徒の気持ちがふっきていてよかった、という声を寄せてくれた。

\*衣装は一部を近くにある高校の演劇部から借用。三姉妹の衣装は生徒の叔母さんが洋裁の先生をしており、縫ってくれた。

＊アクシデントがあるから面白い

前年は文化祭3日前に、一人の生徒がバイク事故で膝のじん帯を損傷。この年は、文化祭1日目に衣装担当の生徒ができあがった衣装を市営バス内に忘れたが、営業所にすぐ連絡をとり無事見つかる。また、文化祭直前に風邪をひいた生徒が2日目の朝に声が出なくなったが、何とか声をふりしぼって精一杯演じた。



《劇成功の要因》

- 前年の英語劇を見た生徒が何人かおり、劇をやるという抵抗感が少なかった。
- 生徒のチームワークの良さ。
- リーダー格の生徒がいたこと。
- 演技以外のことは自分たちでできたこと。
- ALTのDanielさんの献身的な援助。
- 場所を体育館にしたため、教室を暗幕で暗くするなどの手間がかからなかった。
- 受講者が13人いたため、役者以外に専門の音響係、照明係を配置することができ、役者はかなり練習に専念できた。

図1 Cinderellaのチラシ

(5) 英語劇(4年間)のまとめ

ここまで紹介してきたのは、私が2回目に取り組んだCinderellaの詳細である。私がK高校に在職中、合計で4回の英語劇の上演を文化祭において行った。

年 度	上 演 作 品	人 数	特 徴
1997	<i>Enoch Arden</i>	7人	教室で上演。人数が足りず、舞台づくりに時間がとられ、リハーサルができず。チームワークは最高によかった。Danielさんの援助大。3回公演。「自由参加大賞」獲得。
1998	<i>Cinderella</i>	10人	体育館で初の上演。図抜けた力をもつ生徒はいなかったが、リーダー格の生徒がおり、すべて生徒まかせでできた。練習熱心で練習回数は抜群。Danielさんの援助大。2回公演。

年 度	上 演 作 品	人 数	特 徴
1999	<i>Run, Melos</i>	10人	メンバーはばらばらで、最後までできるか大きな不安。主役の二人の生徒の力が抜群で、何とかできる目算はあった。Brandonさんの援助大。1回公演。
2000	<i>Jimmy Valentine</i>	7人	生徒が真面目で、生徒の英語力の伸びをもっとも感じることができた。メンバーは女子のみで2回公演。Brandonさんの援助大。

## (6) 英語劇の取り組みの発展…新たな担当者にバトンを渡す

その後、私がK高校から別の高校へ異動することになり、最後の年に一緒に「英会話」の授業を担当していた甚目誠先生が英語劇の実践を引き継いでくださることになり、新たな歴史を刻むことになった。途中、新たなALTが配属されることになるが、彼女たちも意欲的に関わってくれ、私が取り組んだときは既存のシナリオをもとに台本作成を行っていたが、徐々にALT書き下ろしの脚本が作成され、最終的にShakespeareの劇に挑むことになる。Shakespeareは英文学科の大学生にとっても難解なものであるが、それを中堅校の「普通の」高校生が演じることになったのだから、驚嘆せざるを得ない。以下に、甚目先生が8年間の英語劇の指導した思い出を振り返られた文章を掲載する：

萩原先生から引き継いだ英語劇も7回の公演を終えた。最初はまさに1年そして結果としてもう1年と試行錯誤を繰り返しながらたどり着いた回数である。しかし、2004年の公演終了後あと2年続ければ、萩原先生の公演を含めて10回になること、つまり10年が経過することになるということから「伝統」という言葉を意識するようになった。公立の高等学校で同じ教科に伝統を作るとすればどのようなことなのか、転勤がつきまとう公立校で、何とか一つでも残せるものがあればと思い継続してきた英語劇もいつの間にか総計11回の公演になっていた。K高校40周年の記

### A Midsummer Night's Dream By William Shakespeare Edited by Kate Delp

#### Characters:

Hermia, a young woman of Athens  
Lysander, Hermia's love  
Helena, Hermia's best friend  
Demetrius, who loves Hermia and is loved by Helena  
Oberon, King of the Fairies  
Puck, a fairy who serves Oberon  
Titania, Queen of the Fairies  
Egeus, Hermia's father/Quince, an amateur actor  
Fairy, a servant of Titania  
Bottom, an amateur actor

#### Act I—Athens

(enter Egeus and Demetrius)

Egeus: You have my permission to marry my daughter Hermia.

Demetrius: She says she won't marry me.

Egeus: Then I will kill her. It is my right. I will call her and tell her this. (calls) Hermia!

(enter Hermia and Lysander)

Hermia: What is it, Father?

Egeus: You must marry Demetrius!

Hermia: I won't! I love Lysander.

Egeus: Demetrius is a worthy gentleman.

Hermia: So is Lysander.

Egeus: If you won't marry Demetrius, you must die or become a nun. I have consulted Theseus, Duke of Athens. He says I am right. You must choose before Theseus marries Hippolyta next week.

Hermia: If I can't marry Lysander, I will never marry at all.

Demetrius: Sweet Hermia, relent. I love you.

Lysander: You have her father's love, Demetrius. Let me have Hermia's. Do you marry him? (to Egeus) My lord, Demetrius made Helena love him, then deserted her. He is a bad man.

図2 A Midsummer Night's Dream の  
脚本の一部 (ALT 作成)



念誌の編集を進める中でも、このような継続的な取り組みを探したがどの教科にもない。そのような歴史の一端を作ることが出来たことは自分自身にもうれしさもあるが、それ以上に前任の萩原先生の英語教育に関する進取の精神が大きく関係していることは否定できない。

模倣から始めた英語劇の指導は、私の教師歴に新たな指導分野を切り開く入り口になっていることは確かで、これを今後の指導にどのように結果として結びつけるのが課題だと思っている。ハッピーエンドで終わらなかった第11回目の公演がそれを私に教えてくれた。また、Jenniferさん、Kateさんの二人の有能なALTに出会えたことは幸運であったと言わざるを得ない。何度も降りかかる難題が何とか乗り越えられたのも2人との出会いがあってこそだと思う。2人のALTの先生にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

劇の理解はスクリプトの中から生まれ、肉体を通して演ずる行為から生まれる現実を通してまたスクリプトに戻る知的な作業である。ロールプレイの教育的役割など劇の指導にはいくつかの視点と面があるが、この8年間私に最も興味があったのは、「解釈」という人間にしかない知的活動である。劇の指導をしていくと、同じ時間と同じ内容を共有しているにも拘らず、とらえ方が各生徒によって大きく違うことに気が付く。時間が経過すれば、解決したはずの解釈がまた新たな課題として我々に迫ってくる。いくつかの層を切り開き見えてくるものへのチャレンジが、私の劇指導の大きな根幹になっている。

古典が現代に生き返る過程を生徒と共に格闘しながら再生させる喜びを得ることが出来たのがこの8年間の良き思い出である。また、夏休み中の練習後、生徒と共に昼食を取りながらお互いを深く知ることが出来るようになったのも大きな喜びの一つである。帰国したJenniferさんのお宅へ指導して頂いた当時の生徒が訪問したことを彼女からの知らせで知った。彼女の真摯な指導は当時の生徒の中に今でも生き続けているのだと思う。また私自身と彼女との手紙を通した（私自身がコンピュータのメールは苦手なので）交流が続いているのは、英語教師冥利に尽きる。

年 度	上 演 作 品	人 数	特 徴
2001	<i>Peter Pan</i>	15人 2クラス 合同	体育館で上演。人数は多いが役割分担に配慮した。舞台づくりの前のセリフ指導に時間がかかった。2回公演。
2002	<i>The Last Leaf</i>	5人	教室で上演。配役が揃わず苦労。モチベーションも今ひとつ。それ以上に自分の指導方針の確立の必要性を痛感。

年 度	上 演 作 品	人 数	特 徴
2003	<i>Jimmy Valentine</i>	8人 [部活動公式試合のため役者を募集]	教室で上演。(以降教室上演。)効果音, BGMを生徒に選出させ劇の総合性を重視。2回公演。自由参加大賞。
2004	<i>The Crucible</i>	11人	劇の時代背景をプレゼンさせ, 現代の古典と称される作品に取り組んだ。ALTが原典を生徒用に書き換える作業を担当。劇のレパトリーが増える。生徒はまさにK高校的な生徒(英語力, 行事に前向き)。2回公演。自由参加大賞。
2005	<i>Much Ado About Nothing</i>	14人	まさに英語劇の古典シェイクスピアの作品に挑む。英語力はなかったが劇を作り上げる意欲は大いにあり。劇の練習から英語に興味を持ちはじめた生徒が多かったのが感動的。2回公演。自由参加大賞。
2006	<i>A Midsummer Night's Dream</i>	10人	シェイクスピアの作品に挑む。演技力, 英語力, 興味, 創造性いずれも高い。創造する喜びを生徒自身感じながら取り組んだ。BGMは初めてクラシック音楽のみで試みる。2回公演。
2007	<i>Love's Labour's Lost</i>	11人	シェイクスピアの作品に挑む。(3年連続。)生徒の指導は過去最も困難を極めた。全てで苦戦。1回公演。

## (7) 英語劇の思い出…卒業生からのコメント

- 英語劇は, 高校生活の中で特に思い出に残っている出来事の1つです。最初, 思港祭で英語劇をやると決まった時, 少し戸惑いました。「元々, 演技に自信がない上に台詞が全て英語で本当にできるのだろうか?」ただ, それと同時に「面白そう, やってみたい。」という期待も感じました。練習を始めてみて, 苦労した点は発音でした。「l」と「r」や「she」と「see」の違いなど, 何度も繰り返して練習しましたが習得するまでかなりの時間を要しました。また, この年の発表は体育館だったので, 声量に関してもかなり意識しながら練習しました。そして, 本番当日。極度の緊張の中, この日のために練習してきたものをすべて出し切るべく, 必死に演じました。上手く出来たのかは自分でもよ

くわからないのですが、「やってよかった」という達成感と充実感は感じました。あと覚えているのは、照明がとても熱くて自分だけ滝のような汗を流していたということ…。それから数年後、後輩たちの劇を見る機会があったのですが、当時の自分よりもはるかに上手で驚きました。自分たちの1学年上の先輩たちから始まり、こうしてここまで続いてきた英語劇に参加できたことが嬉しいです。(Y.Y.)

- 選択科目、英会話。私は三年の選択科目に、英会話を取ることを決めていました。英文法はとても得意と言える科目ではありませんでしたが、英語自体には興味があったのです。実際授業を受けてみて、ゲームをしたりディスカッションをしたりと、思ったとおりの楽しい時間が過ごせました。その夏、私たちは文化祭に向けて英語劇の準備をはじめました。

私たちの選んだ劇は、『シンデレラ』。私の役は、継母とナレーターでした。体育館に集まって台本を読んだり背景を描いたり、Daniel先生の演技指導が入ったりと、忙しくもありました。けれど、今まだ忘れていないところを見ると、やはり楽しさが先立っていたのだと思います。練習でまず躓き、そして最後まで難しいと感じ続けたことは、『シンデレラ』の発音です。私がセリフの中で『シンデレラ』と言うと、大抵ストップがかかって、そこからしばらく発音練習になってしまいます。何度聞いてみても、何度言ってみても、Daniel先生と同じようには言えず、どこが違うのか自覚もなく、本当に難しいと思いました。休憩中もDaniel先生を捕まえては、発音の練習をする私でしたが、結局、うまく発音できないままに本番を迎えてしまったように感じます。それでも、やって良かったと思います。発音は難しく、文章を覚えるのは慣れなくて、演技も固かったと思います。

ではどこが良かったのかと言えば、そうして練習を重ねるうちに、授業の中にはない雑談が生まれていたことだと思うのです。Daniel先生を交えての雑談は、当然英語になります。片言の英語でも丁寧に聞き取ってくださった先生。そして真剣に返事を返してくださったので、私は会話をすること自体を楽しむことができました。会話を楽しむことが出来たからこそ、英語劇という一見肩肘張ってしまいそうな、日本人の苦手意識を刺激するようなものも、楽しく参加することが出来たのではないのでしょうか。英語劇は、文化祭当日よりも、それまでの日々に、本当の価値があったのだと思います。この日々があったから、今でも英文法はわからないけれど、英会話を楽しむことができるの

だと思います。英会話の授業を受けることが出来て、英語劇に参加することが出来たことは、とても良い経験になりました。(N.H.)

- 高校生活最後の文化祭、私たちが選んだのは演劇「シンデレラ」だった。それも台詞がすべて英語の劇である。わずか13人の3年生英会話選択クラスのみみんなが一つになった。

台詞暗記の前に、発音と発声の練習。発音に集中すると声が小さくなり、発声に集中すると発音がおろそかになり…、声を出し続ける日が続いた。週一度しかない授業は、先生からイントネーションのアドバイスをもらい、繰り返し練習。放課後は、道具作りのため台詞を口ずさみながら遅くまで図画工作。みんなが台詞を一通り覚えられ、必要な道具も半分ほどできあがった頃あることに気付いた。衣装がない！友達に借り、作り、それでも用意できないものは他校から借り、すべてが揃ったのは文化祭当日まで一週間を切ったときだった。残された数日間の放課後は体育館で練習。そしてあっという間に本番。反省箇所はあったが、みんなの笑顔を見たときは達成感でいっぱいだった。文化祭実行委員をやりながらの継母役、忙しく校内を走り回った二日間だった。しかし今思えば出すと積極的に学校行事に参加し、その時間を有意義に過ごしていたなと懐かしと思う。こんな経験ができたクラスは最高だったし、先生方にも感謝したい。(S.A.)

- かれこれ10年以上昔、受験用の英語勉強は無意味だと思い、「“生”の使える英語を学びたい」と思い選択した、「英会話」の授業。当時は7人しか選択者がいなくて、授業の一環として、文化祭で英語劇の公演なんてできるとは思わなかった。しかし、熱意あふれる教育者の後押しもあり、見事に(?)公演をやり遂げることができた。公演が決まってからの授業は劇の練習に当てられ、夏休みにもみんなで集まり、何度も何度も練習したのを覚えている。練習はハードで、当時のアシスタントティーチャーのDaniel氏に何度も発音や表現方法を手直しされた。私の役はセリフも少なく、出番もほとんどないのにあれだけ指導されたのだから、主役を演じた生徒はさぞ大変だったのではないだろうか……。人前で演技をするだけでも抵抗があるのに、それを英語で表現することは倍の恥ずかしさや照れがあった。また上演した"Enoch Arden"という劇は決して知名度のある話ではないので、劇の内容が観客に伝わるのかも不安に感じていた。文化祭当日、様々なアクシデントを乗り越え、公演を終えることが出来て本当に良

かった。見に来てくれた友人や先生たちからもとてもよい評価を得られ、ほっとした。当時のメンバーの中には卒業後、留学の道を選んだ生徒、外国語を専攻する生徒もいて、「英会話」の授業を通じて、英語の楽しさを感じられたのだと思う。

私たちが卒業後、翌年の英会話選択授業の履修者は倍近い人数になっていた。その中には私たちが演じた劇を見ていた生徒も多く、嬉しかった。その年の文化祭で見た「シンデレラ」の劇は素晴らしかった。英語の発音も良かったが、一番感銘を受けたのは英語で自分の気持ちを伝えている点であった。この点は毎年、公演を重ねていく中で徐々に上達しているように感じたので、きっと先生たちも力をいれていた点なのだと思う。実際のところ、英会話の授業で英語劇を上演しても英単語力がつくわけでも、受験で英語の点数がよくなるわけでもないと思う。しかし間違いなく表現力、自分の言いたいこ

と・思うことを、相手に英語で伝える能力は身につくと思う。それは演劇という形を通してだからこそである。また一番重要なことは、「英語」が好きになり、「英語」で話をしたくなるということだ。これは他の英語の授業では感じる事が出来ない。社会人となり、外国人の方（英語圏以外の方も含む）とふれあう機会が増えた。その時に片言の日本語とカタコトの英語でコミュニケーションを図る際、英会話の授業を選択していて良かったと感じずにはいられない。



▲壊されたガラスの靴が足に合うのがシンデレラだ。



▲本番を終えて記念撮影。

高校生活最後の文化祭、私たちが選んだのは神劇『シンデレラ』だった。それもセリフがすべて英語の劇である。私たちはわずか13人しかいない3年生の英会話選択クラス。夏休みに台本を家

に持って帰り、セリフを覚えることになった。しかしその前に発音と発声の練習。早口言葉の練習や、体育館の前と後ろに分かれて大声で叫び合ったりした。日本語ですら大変なのに、英語となると舌がからまり、一日その練習だけで終

## 英語劇『シンデレラ』の舞台

◆ 神奈川・港北高校英会話選択クラス

わってしまふこともあった。

2学期になると、週一回しかない英会話の授業で、アメリカ人のダンエルさんと先生からアドバイスをもらった。また毎日のように練習と道具作りのために放課後まで残り、帰りが遅くなった。

全員がセリフを何とか覚えられ、必要な道具も半分出来上がった頃、雑間にぶつかった。「衣装がない！」。友だちに借り、それでも用意できないものは家で作ってもらったり、近くの高校の演劇部から貸してもらったり。道具、衣装がすべて揃ったのは文化祭まで一週間を切ったあたる日のことだった。私たちは道具をすべてセフトし、それぞれの衣装を身にまとい、放課後の体育館でリハーサルをした。そして当日、もう一度、朝一番から最後のリハーサル。声がいまいち小さかったり、場面転換がうまくいかなかったり。しかし本番になると、不安が自信へと変わり、大きな失敗もなく、無事成功！その体験は、私たちにあって、人間として本当に大切なことを教えてもらう場となった。

(3年)

図3 『新々・文化祭企画読本』より



今回、K高校での英会話授業での英語劇公演が一時休止してしまうのは、OBとしては残念に思うが、またいつの日か英語に興味を持つ生徒たち、それをサポートしたいと願う先生たちの手で復活する日がきっと来ると信じている。最後に、長年に渡り、英語劇公演を支えてくれた萩原先生、甚目先生、歴代アシスタントティーチャーの皆様に感謝いたします。(選択英会話英語劇初代OB A.T.)

### 3. 学年英語暗唱発表大会 (全体の流れ)

ここで紹介するのは、S高校、T高校における「学年英語暗唱発表大会」の取り組みである。この取り組みが上記の英語劇と異なるのは、英語科主催の学年行事として位置づけられ、同じ科目を担当する教科担当者が共通の取り組みとして行うことで初めて可能になるということである。特にT高校では、「英語表現Ⅰ」の授業において1学年8クラス(1クラス40名)をそれぞれ出席番号順に単純に2分割して授業を行っていたため、学年で16クラスあることになり、教科担当者の数が再任用教員、非常勤講師も含み合計で9名であった。学年共通の行事にするため、各担当者に趣旨を説明し、ハンドアウトなども原則共通にして、意思疎通をしっかりと行うことが必要であり、なかなか気が抜けない取り組みとなった。

S高校では、Martin Luther King, Jr. の "I Have a Dream" と Charles Chaplin の "The Great Dictator" のスピーチ両方を扱い、生徒それぞれが一つを選んで発表した。T高校では、"I Have a Dream" のスピーチを全クラスで共通に扱った。

- |       |  |
|-------|--|
| ◆ S高校 | 2年次のオーラル・コミュニケーションⅠの授業で "The Great Dictator" "I Have a Dream" の両方を扱い、生徒がどちらか一方を選択し発表 |
| ◆ T高校 | 1年次の英語表現Ⅰの授業で "I Have a Dream" を扱い発表   |

#### \* レシテーションのモデル原稿

##### "The Great Dictator"

Soldiers! Don't fight for slavery! // Fight for liberty! // In the seventeenth chapter of St. Luke, / it is written / that the kingdom of God / is within man, / not one man / nor a group of men, / but in all men! // In you! // You, the people, have the power, /

the power to create machines,/ the power to create happiness! // You, the people,  
have the power / to make this life free and beautiful, / to make this life a wonderful  
adventure. // Then, in the name of democracy, / let us use that power, / let us all  
unite. // Let us fight for a new world, / a decent world / that will give men a chance  
to work, / that will give youth a future / and old age a security. // Soldiers, in the  
name of democracy, / let us all unite! //

### "I Have a Dream"

I say to you today, / my friends, / even though we face / the difficulties of today  
and tomorrow, / I still have a dream. // It is a dream / deeply rooted in the American  
dream.// I have a dream / that one day / this nation will rise up / and live out / the  
true meaning of its creed: // "We hold these truths / to be self-evident, / that all men  
are created equal." // I have a dream / that one day / on the red hills of Georgia, / the  
sons of former slaves / and the sons of former slaveowners / will be able to sit down  
together / at the table of brotherhood.// I have a dream / that one day / even the  
state of Mississippi, / a state sweltering with the heat of injustice, / sweltering with  
the heat of oppression, / will be transformed / into an oasis of freedom and justice.//  
I have a dream / that my four little children will one day / live in a nation / where  
they will not be judged / by the color of their skin / but by the content of their  
character.// I have a dream today! //

### \* 暗唱発表大会までの大きな流れ

- 各授業で数回練習する
- ↓
- 各クラスで発表し、生徒が相互評価をしてクラス代表を決定する
- ↓
- 代表者を集めて、担当の英語教員がかかわり放課後に数回練習会を行う  
この個別指導で生徒の英語力は飛躍的に伸びる
- ↓
- 体育館で学年発表大会を行う（3月）  
司会も生徒が英語で行う

## 4. クラス内発表までの授業の過程

以下, "The Great Dictator" に関しては○, "I Have a Dream" については◇で示す。

### (1) モデルスピーチの背景を理解する

<p>(1) 誰が話しているのか?</p> <p>○独裁者ヒンケルに間違えられたユダヤ人の床屋</p> <p>◇アメリカの公民権運動の指導者であるキング牧師</p>
<p>(2) 誰に話しているのか?</p> <p>○目の前にいる数万人の兵士と, 全世界の人びとに対して</p> <p>◇目の前にいる20万人以上の人びとと, アメリカ全土の人びとに</p>
<p>(3) どこで話しているのか?</p> <p>○数万人の兵士を前にした演台の上で</p> <p>◇アメリカの首都ワシントンに集まった20万人以上の人びとの前</p>
<p>(4) なぜ話しているのか?</p> <p>○独裁者を痛烈に批判し, 全世界の人々に自由のためにたたかうことを呼びかけるために</p> <p>◇アメリカにおける人種差別の撤廃を求めるために</p>
<p>(5) 何を語りかけているのか?</p> <p>○憎しみのためではなく, 自由と希望, 愛のために闘うこと</p> <p>◇人種差別の撤廃と人種間の融和をめざすこと</p>

\* 近江 (2005) を参考に作成

### (2) モデルスピーチの分析

#### ①繰り返されている語句を抜き出す

<p>○ You, the people, have the power... (2回)</p> <p>◇ I have a dream.... (6回)      など</p>
---

#### ②対比されている語句を抜き出す

<p>○ Don't fight slavery! ⇔ Fight for liberty!</p> <p>◇ the color of their skin ⇔ the content of their character      など</p>
--



### (3) モデルスピーチを音読する

#### ①英語の単音、特に子音に気をつけて読む

特に日本語にない th, f/v, r, l, n (特に語末の n) などの発音のしかたをまず丁寧に確認し、それぞれの音が使われている部分にマークをさせ、「一語読み」(単語を一語一語読む)をさせる。 例) Don't fight for slavery!

#### ②強弱のリズムに気をつける

英語では強く読むところと弱く読むところが交互に繰り返されることに気をつけ、●で示されたところは強く、それ以外のところは弱く読み、強弱の波ができているかどうか確認させる。

#### ③つながる音と消える音に注意して、音がつながるように読む

語が子音で終わり、次の語が母音で始まるときはつなげて読む。また、[t] [d] で終わる語は、次に子音で始まる語が続く場合、発音せずに飲み込むように読むと、次の語とのつながりがなめらかになることに気づかせる。

例) Then, in the name of democracy, let us use that power.

#### ④対比されている語句はそれぞれを強く読む

(2) の②で分析した対比されている語句は、その対比が聞いている人にわかるように、それぞれを強く長めに読むように指導する。

例) Not **one** man nor **a group of** men, but in **all** men!

#### ⑤フレーズごとに読む

意味のかたまりは一気に読み、意味のかたまりの後で間(ポーズ)を置くように読む。スラッシュを入れて、練習する。

#### ⑥ペア・グループで読み合い、相互評価する

ポイント	評価
① 強弱のリズム	1   ・   2   ・   3
② 音のつながり (つながる音, 消える音)	1   ・   2   ・   3
③ 対比されている語句を強く読む	1   ・   2   ・   3
④ フレーズごとにポーズを置いて読む	1   ・   2   ・   3

1 = Fair   2 = Good   3 = Very good

#### (4) クラスでレシテーションをする

##### ①以下のような練習をして、スピーチの英語を頭に残す練習する

- ア. フレーズごとに原稿に目をやり、顔をあげて言ってみる。
- イ. ペアを組み、原稿を左手に持ち、顔をあげて相手とアイ・コンタクトをとる。
- ウ. 穴あき音読 (blank reading) に挑戦する。
- エ. スピーチの音声を聞きながら、それに合わせて英語を言ってみる (overlapping)。

Recitation のためのワークシート(2)		
1 I say to you today, my friends,	1 I say to you [ ] my [ ]	1 私は今日、友人である皆さんに 申し上げます
2 even though we face	2 even [ ] we [ ]	2 私たちは直面していますが
3 the difficulties of today and tomorrow,	3 the [ ] of today and [ ]	3 今日そして明日の困難に
4 I still have a dream.	4 I still have a [ ]	4 それでも私には夢があります。
5 It is a dream	5 It is a [ ]	5 それは夢です
6 deeply rooted in the American dream.	6 deeply [ ] in the American [ ]	6 「アメリカの夢」に深く根ざした。
7 I have a dream	7 I have a [ ]	7 私には夢があります
8 that one day	8 that one [ ]	8 いつの日にか、
9 this nation will rise up	9 this [ ] will [ ] up	9 この国が立ち上がり
10 and live out	10 and [ ] out	10 実践するという夢を
11 the true meaning of its creed:	11 the true [ ] of its creed:	11 次の信条の本当の意味を。
12 "We hold these truths	12 "We hold these [ ]	12 「私たちは次の真実をみなす
13 to be self-evident,	13 to be [ ]	13 自明のものであると
14 that all men are created equal."	14 that all [ ] are created [ ]"	14 『すべての人は生まれながら にして平等であるから』
15 I have a dream	15 I have a [ ]	15 私には夢があります
16 that one day	16 that one [ ]	16 いつの日にか、
17 on the red hills of Georgia,	17 on the red [ ] of Georgia,	17 ジョージア州の赤土の丘の上で
18 the sons of former slaves	18 the [ ] of former [ ]	18 かつての奴隷の息子たちと
19 and the sons of former slaveowners	19 and the [ ] of former [ ]	19 かつての奴隷所有者の息子たちが
20 will be able to sit down together	20 will be [ ] to [ ] down together	20 一緒につくことができるとい
21 at the table of brotherhood.	21 at the [ ] of [ ]	21 兄弟愛のテーブルに。
22 I have a dream	22 I have a [ ]	22 私には夢があります
23 that one day	23 that one [ ]	23 いつの日にか
24 even the state of Mississippi,	24 even the [ ] of Mississippi,	24 ミシシッピ州でさえ
25 a state sweltering with the heat of injustice,	25 a state sweltering with the [ ] of [ ]	25 不正の炎でうだっている州、
26 sweltering with the heat of oppression,	26 [ ] with the heat of [ ]	26 圧制の炎で焼けついている州、
27 will be transformed	27 will be [ ]	27 変えられるとい
28 into an oasis of freedom and justice.	28 into an oasis of [ ] and [ ]	28 自由と正義のオアシスに。
29 I have a dream	29 I have a [ ]	29 私には夢があります
30 that my four little children will one day	30 that my four little [ ] will one [ ]	30 私の幼い4人の子どもたちが いつの日にか
31 live in a nation	31 live in a [ ]	31 国に住むという夢です
32 where they will not be judged	32 where they will not be [ ]	32 子どもたちが判断されるよう
33 by the color of their skin	33 by the [ ] of their [ ]	33 肌の色ではなく
34 but by the content of their character.	34 but by the [ ] of their [ ]	34 人格の中身で。
35 I have a dream today!	35 I have a [ ] today!	35 今日、私は夢を見るのです。

図4 blank readingのハンドアウト

##### ②以下の点に注意しながら、クラスの前でレシテーションをする

- ア. アイコンタクト：前をしっかり見て、聴衆全体に目を配る。
- イ. 発音：強弱のリズム、音のつながり、ポーズに注意する。
- ウ. 声：大きな声ではっきり、ゆっくり話す。感情を込めて話す。
- エ. 姿勢・表情：背筋を伸ばしてリラックスして立ち、まっすぐ聴衆のほうを向く。  
内容に合わせて自然に手や体の動きをつけてみる。

### ③クラスメートの発表を相互評価する

ポイント	評価
① 内容の理解	1   ・   2   ・   3
② 発音	1   ・   2   ・   3
③ 声の調子・表現力	1   ・   2   ・   3
④ 姿勢・表情	1   ・   2   ・   3
⑤ 発表に対する積極性	1   ・   2   ・   3

1 = Fair   2 = Good   3 = Very good

## 5. 学年暗唱発表大会を行う

クラス内での発表を終え、生徒の相互評価をもとに各教科担当者がクラス代表生徒を決定する。その後、代表生徒を集めて、英語教員が多数関わり、放課後に数回練習会を行う。個別指導を徹底的に行うこともあり、生徒の英語力は飛躍的に伸びる。

暗唱発表大会当日の進行、運営は基本的に生徒主体で行う。司会者二人を学年の生徒から募り、教員が用意した司会者原稿をもとに、進行をしていく。聞き手の指導として、生徒による評価表を配り相互評価をさせる。審査員として、英語科教員二人または、英語科教員とALTが審査を行い、順位を決定する。教員による評価表は話し手に渡

される。結果の集計はその場ですぐに行うことができなかったため、年度末の終業式場で司会者生徒が結果を発表し、入賞者には賞状と副賞（辞書や単語集など）を贈呈した。

《職員会議資料》 2013.2.22 英語科

#### 2年生英語暗唱(レシテーション)学年発表会について(案)

- ◆開催内容  
「2年生英語暗唱学年発表会」を3月の特別時間割の中で行う。
- ◇日時  
暗唱発表を学年の最後に位置づけることで、1年間の授業で身につけてきた英語読解能力の一層の充実をはかり、お互いの発表を聞きあうことで生徒同士の学び合いの機会としたい。
- ◇方法  
3学期のオータル・コミュニケーション1の授業で全員の生徒がスピーチの暗唱発表を行い、クラスごとに選ばれた生徒(各クラス1名、合計15名程度)が体育館で発表を行う。
- ◇具体的な進行
  - ※1組から順番に発表の生徒がワイヤレスマイクを拾って発表をする。
  - ※発表生徒はステージに向かって右側に待機する。
- ◆表彰は3位まで行う(予定)。結果発表、表彰は終業式の中で行う。

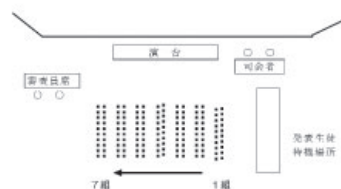


図5 職員会議の資料

## recitation: 英語暗唱発表大会用評価表

Speaker's name:

1. fluency (滑らかさ)	5 (Excellent) 4 (Good) 3 (Not bad) 2 (Fair) 1 (Poor)
2. pronunciation (発音)	5 (Excellent) 4 (Good) 3 (Not bad) 2 (Fair) 1 (Poor)
3. posture (姿勢)	5 (Excellent) 4 (Good) 3 (Not bad) 2 (Fair) 1 (Poor)
4. memorization (暗記)	5 (Excellent) 4 (Good) 3 (Not bad) 2 (Fair) 1 (Poor)
5. expressiveness (表現力)	5 (Excellent) 4 (Good) 3 (Not bad) 2 (Fair) 1 (Poor)
*comment	

Judge's Name:

## 2年生英語暗唱発表大会・司会者用原稿

Good morning, ladies and gentlemen. We are going to start the English recitation contest. Before we begin, I'd like to introduce two judges. Mr. ○○ and Mr. △△. They are both English teachers. Ladies and gentlemen, please give them a big hand. We are the hosts for this recitation contest. My name is ○○. My name is △△.

1. It is the time to start. The first speaker is Ms. ○○ from Class 2-1.

(中略)

All of the speakers have finished making their recitations. I hope all of you enjoyed listening to their recitations. The speakers did a great job. Ladies and gentlemen, please give them another big hand. Now, let's ask the judges to give some comments about the students' recitations. First, let's hear from Mr. ○ ○. Thank you for your comments. Next, let's hear from Mr. △△. Thank you for your comments. The result of the recitation contest will be announced at the closing ceremony on March twenty-fifth. Thank you for coming to this recitation contest.

## 6. 取り組んだ生徒の感想（T高校のもの）

- キング牧師のスピーチ暗唱は大変でしたが、英文を暗唱するのは今までやったことがなかったので良い機会になりました。
- キング牧師のスピーチ発表は緊張しましたが、クラスの人たちの工夫や良い点を見つけることができて良かったと思いました。
- キング牧師のスピーチ暗記・発表にはかなり苦戦したが、頭の中の英語を口に出すというとても良い経験になったと思う。
- 英語を暗記して覚えるだけでなく、みんなに訴えかけるようなスピーチをすることで話す力が高められた。



図6 体育館での発表の様子（S高校）

## 【参考文献】

- 荒牧鉄雄 (1996) 『高校生の英語劇』 日栄社.
- 石井敏他 (1994) *Oral Communication Course C Speak Out* 桐原書店.
- 近江誠 (2005) 『間違いだらけの英語学習—常識38のウソとマコト』 小学館.
- 大井恭子他 (2018) *Empower English Expression II Elementary / Mastery Course* 桐原書店.
- 岡田陽・佐野正之 (1987) 『みんなで創る英語劇』 (全3巻) 玉川大学出版部.
- 高文研編 (2004) 『新々・文化祭企画読本』 高文研.
- 佐野正之 (1990) 『英語劇指導マニュアル』 玉川大学出版部.
- Peter Viney and Karen Viney (1995) *Only in America Activity Book* Oxford University Press.
- 文部科学省 (2018) 「平成30年度 中学校等における英語教育実施状況調査【集計結果】」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415043\\_09\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415043_09_1.pdf)